

平成 17 年度環境省委託事業
「日本の森林を育てる薪炭利用キャンペーンフィージビリティースタディ調査」
第 1 回戦略検討会議・議事録

日時：平成17年12月18日（土）9:00～12:00

場所：三州足助屋敷工人館 2 階

	氏 名	所 属
委 員	泊 みゆき	NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク
	松村 正治	神奈川森林エネルギー工房、NPO 法人よこはま里山研究所
	広若 剛士	国際炭やき協力会
	田中 克樹	(社) 農山漁村文化協会
	山口 卓勇	NPO 法人環境エネルギー政策研究所
	村田 央	フリーライター
アドバイザー	松野 薫	(財) 林政総合調査研究所
	大河原 有史	(株) 三州足助公社
事 務 局	相川 高信	薪く炭く KYOTO
	野瀬 光弘	薪く炭く KYOTO
	嶋田 俊平	薪く炭く KYOTO
	木俣 知大	NPO 法人森づくりフォーラム

配布資料

- ・ 戦略検討会議名簿
- ・ 環境省 F S 調査企画書
- ・ 9月23日東京会議議事録
- ・ 生産・流通・消費調査の中間報告
- ・ 先進事例報告シート
- ・ 行動宣言作成テンプレート
- ・ ブックレット作成案

参考資料

政策提言申請書 + 環境省報道発表

政策提案会用パワーポイントカラー版

平成16年度事業計画報告書

薪炭レポーター養成講座チラシ

参考資料：季刊木質エネルギー（第3号）

参考資料：季刊木質エネルギー（第8号）

(1) 開会

相川

- ・ (開会挨拶)

(2) 自己紹介

木俣

- ・ マトリックスを用いて整理を試みたい。
- ・ 第一軸は、生産・流通・消費である。
- ・ 第二軸は、制度的解決、技術的解決、倫理的解決という整理であり、行政、民間、NPOのそれぞれができることと対応している。
- ・ 具体的にどのような課題を整理するために、こういった活動をしているのか、という視点で自己紹介をお願いしたい。

泊

- ・ バイオマス産業社会ネットワークの理事長兼事務局長。
- ・ NPO法人になったのは2004年だが、1999年から活動している。
- ・ 再生可能なエネルギーの中で、バイオマスエネルギーは最も有望であるにも関わらず、日本ではあまりメジャーではないことを問題意識として持っている。
- ・ 石油が逼迫していくとバイオマスへのニーズが高まると予想されるが、不法伐採、プランテーション等、持続的にバイオマスが生産されるか否かのチェックが必要である。
- ・ 会員数は450人程度。企業、行政、NPOなど多様な人々が参加している。
- ・ どうしたらよりよいバイオマス利用を進めることができるかという観点で活動している。

山口

- ・ ISEP (環境エネルギー政策研究所)の所属である。
- ・ ISEPは、自然エネルギーの研究では日本ではトップと自認しているが、これまで薪炭利用については調査したことない。
- ・ 環境省まほろば事業の中で、備前市でペレットボイラーの導入のための調査をしている。

相川

- ・ 一言補足させていただくと、薪炭キャンペーン戦略会議はいくつかのテーマを持って実施していく。
- ・ 大きくは、地域・文化、住宅、食という3つの切り口である。
- ・ ISEP 飯田さんから、暖房という面で見るときに、多様なバイオマスの種類があるということを教えていただいた。
- ・ そこで、住環境の専門家ということで、山口氏を紹介してもらった。

広若

- ・ 国際炭やき協力会で活動している。

- ・ 色々なプロジェクトがあるが、地域、事例にふさわしい専門家をコーディネートしてプロジェクトを進めるという方式である。
- ・ ロシアのモンゴリナラが単一植生で地域の植生に悪影響を与えている。落ち葉によって山火事が起きて、野生動物の生息域を奪っている。そこで、モンゴリナラを伐採して、木炭化を実施している。最終的には日本へ輸出している。
- ・ 色々な考え方があると思うが、ある程度海外からの輸入炭がないと、現在の日本の薪炭市場は維持できないのも事実である。
- ・ マスの視点から海外の生産拠点を整備し、日本でも海外でも森林資源を維持していきたい。
- ・ 韓国の研究者と協働で、自然農業のプロジェクトも実施している。

松村

- ・ 神奈川森林エネルギー工房の代表、よこはま里山研究所（NORA）の理事長もやっている。
- ・ 神奈川地域の里山整備活動がきっかけで、里山資源が「もったいない」ということから活動を始めた。
- ・ 反原発という流れから来た人たちと始めたのが、神奈川森林エネルギー工房である。
- ・ 定常的に使うエネルギーということで、バイオマスに着目した。
- ・ 自然環境センターの建て替え時の、バイオマスボイラー導入調査も実施した。
- ・ 神奈川自然環境センターの中川重年氏と協働で実施した。
- ・ 神奈川の未利用緑地（主に公有地）と、利用したい市民とのマッチングも行っている。
- ・ 薪く炭くで作成したバイオスマップのような形で、神奈川県内のマッピングも進行中である。

田中

- ・ 農文協は創立 65 周年の出版社である。社団法人農山漁村文化協会という、農水省の外郭団体という側面も持っている。
- ・ 戦時中は、劇団を組んだり、幻燈やレコードを作って農村を回ったりしていた。
- ・ 戦争に協力してしまったという反省もあり、生産文化から始めようということで、戦後は再スタートを切った。
- ・ 「暮らしの自給」が、農文協の主要なテーマである。農業の近代化に協力するなど過去において、反省点もあったが、ぶれない視点としてこのテーマを持っている。
- ・ 個人レベルで完全な自給はできないが、地域やコミュニティー単位での「自給の社会化」を進めたいと考えている。
- ・ 10 数年前から、炭の農業利用（土壌改良）にも取り組んできた。
- ・ 連作障害の被害が出ていたので、土壌改良という観点で、普及に取り組んできた。
- ・ 個人的にも参加できて、嬉しく思っている。
- ・ 今回は、議論したことを農文協なりにまとめていきたい。
- ・ キャンペーンで議論したことを、マスメディアとしてブックレットを作り広めていく。
- ・ 直販ではなく、書店販売を想定して、手にとってもらえるようにしていきたい。
- ・ 食育フェアにも、薪く炭く KYOTO 名でキャンペーンもからめて出展してもらう予定である。

村田

- ・ 農文協のアシスト的役回り。
- ・ フリーライター、編集者をしている。
- ・ 国土緑化推進機構の機関誌「ぐりーん・もあ」等、第一次産業関係の仕事を中心としている。
- ・ 専門家的視点というよりは、薪炭利用キャンペーンを「いかに見せるのか」という部分を担当しているつもりである。
- ・ 「焚き火大全」(創森社)という本の、「焚き火料理」の章を担当して執筆している。

木俣

- ・ 本日は欠席しているが、バイオマス産業社会ネットワークの岡田氏にも委員に入らせていただいている。

松野

- ・ 林政総合調査研究所に所属している。
- ・ 林野庁の外郭の研究所である。
- ・ 平成16年度から、木炭を始めとした特用林産物の流通調査を林野庁から受託している。木炭については、自分で調査している。
- ・ 矢作川流域は、これだけ細かく炭窯の調査をしている地域は他になく、既存研究の積み重ねがあり、面白い地域であると感じている。

木俣

- ・ 通常の委員会では、事務局はあまり意見を言わないものであるが、今回はよりよいキャンペーンの展開のために、積極的に発言をさせていただきたいと思っている。

野瀬

- ・ 薪く炭く KYOTO の研究員である。
- ・ 今回のキャンペーンでは、生産・流通等の調査を担当している。
- ・ 事前に名古屋、足助の炭問屋のヒアリングを実施し、この地域の概略はおぼろげながら見えてきたということである。
- ・ 普段は、ひのでやエコライフ研究所という環境コンサルティング会社で働いている。廃棄物・一般廃棄物の処理等の統計、消費者情報に基づいて提言するという仕事をしている。

相川

- ・ 学生時代に京都にいて、薪く炭く KYOTO の活動を始めた。
- ・ 大学時代は農学部の林学で、森林生態学を専攻していた。
- ・ 就職して今は東京にいる。UFJ総合研究所の環境・エネルギー部に所属している。
- ・ 新エネルギー、環境政策、市民社会実現に向けた調査研究を行っている。
- ・ キャンペーン事務局を担当しているので、委員の方々へは相川から連絡をさせてもらう。

嶋田

- ・ 現代表の松田と薪く炭く KYOTO を始めた。

- ・ 京都北山で林業の手伝いをしていた。柱が売れなくなっている地域であり、新しい木材利用としてバイオマスに着目した。
- ・ プラントメーカー、電力会社等の産業よりの方が多いが、薪く炭く KYOTO の活動では、実際にエネルギーを使う市民（ユーザー）の感覚を伝えることを目指して活動している。
- ・ プレック研究所で働いている。自然再生、動植物の調査を実施している。

木俣

- ・ 森づくりフォーラムに9月までいたが、今は国土緑化推進機構に移り、キャンペーンに関わっている。
- ・ 市民が森づくり、木づかいにどう関わっていくことができるか、という点に興味があって活動してきた。
- ・ 「木づかい」という点では、「近くの木で家を作る運動」といったものがあるが、一生に一度しか関われない可能性もある。
- ・ 消費者運動としていくためには、木質バイオマス利用の方がより日常的に関わることができるので、可能性があるのではないか、と考えている。

（3）キャンペーンの経緯の説明

相川

- ・ 薪く炭く KYOTO では、「薪炭グルメ調査」等の薪炭利用の事例調査を行ってきた。
- ・ その他にも、銭湯や京都の火祭りの調査などを行ってきた。
- ・ その結果、現在でも日常的なレベルで、木質バイオマスが今も多様な形で使われていることが分かった。その結果を森林バイオマス絵巻としてまとめることになった。
- ・ 中国産の木炭の輸出が禁止されたのを契機として、環境省の政策提言事業に応募し、優秀提言に選ばれた。
- ・ 当初の政策提言から比べると内容はかなり変わってきたが、生産・流通・調査という枠組みは今に生きている。
- ・ FS 調査の企画書は、環境省と検討する中で固まってきたものである。

（4）生産・流通・消費調査報告

野瀬

- ・ 矢作川流域をモデル地域に、流通業者、生産業者を調査中である。
- ・ 生産者は、「炭焼き 100 選」から選定して、個別に訪問ヒアリング調査を実施している。
- ・ 流通業者は名古屋市の満悦商店と、足助の炭問屋である三木氏の二箇所にヒアリングに行った。
- ・ 三木氏によれば、中国輸入禁止後、炭の質が劇的に悪化したそうである。
- ・ 「炭焼き 100 選」で紹介されていた生産者は、当時に比べて 1,2 割減ってしまったのではないかと。
- ・ 炭をトラックに積めるかどうかという点が、炭焼きを続けられるかの境目になっているかもしれない。
- ・ 梶誠氏が、足助炭焼き塾で後継者育成に取り組んでいる。現在までに 16 人が卒業している。
- ・ 木炭の品揃えを保つことが困難になっているようである。

(5) ディスカッション

生産段階

木俣

- ・最初に、薪炭利用を進めるにあたり生産段階での課題とその解決策について議論していただきたい。

広若

- ・日本の木炭問屋が、中国の木炭の品質やロットの揃わなさなどの不安定性に嫌気をさしており、中国産に対するニーズは減ってきている。
- ・現状では中国産の木炭は、ミャンマー、ラオス産に置き換えられつつある。しかし、ミャンマー、ラオス産で全てを代替していくのは無理である。質、量の面からもオガ炭が代替していくのだと予想している。
- ・日本の黒炭はこのオガ炭と競合するだろう。

野瀬

- ・生産段階としては原木を運ぶ際に、玉切りしてトラックに積み込む作業が特に大変なようである。原木の運搬が課題なのではないか。

広若

- ・和歌山県では、木材伐採業者と製炭業者との分業化が進んでいる。
- ・また、岩手県では、チップ業者が原木を伐採していると聞いている。
- ・原木の運搬技術は、若い頃から身体で体験していないと難しい(重いものを運ぶことができない)。

野瀬

- ・大量生産しているところには、そういった仕組みもあるかもしれない。
- ・若い時に炭焼きを体験した人もいるが、これから経験のない人も出てくるだろう。
- ・今後はリタイヤ層が炭焼きを始めた場合、若い頃の経験がない場合もある。

広若

- ・途上国では、樹を切ることに慣れている場合がほとんどである。
- ・炭焼きの原木調達の技術は、針葉樹を切って材にして使う技術と同じである。
- ・備長炭であれば高く売れるので、原木を分業してもコストがあう。しかし、黒炭では合わない。
- ・岩手では、50円/kgくらいになっており、苦しい。

泊

- ・中学生くらいから、炭焼きを始めとした林業技術に関する講習などを受けさせてはどうか。

松村

- ・神奈川では、公有地や市民の森で森林ボランティアによる炭焼きが活発に行われている。
- ・基本的に団体で行っており、シーズンになると毎週のように活動をし、非常に熱心であり、焼きたくて仕方がないという印象を受ける。

- ・ 昨年から横浜市内の団体で、アジェンダを設定し、使い方の検討をしている。
- ・ 横浜の市街地に隣接していることもあり、煙が問題になっていることが多いが、例えば都築中央公園では煙を二次燃焼させているなどの工夫をしているようである。
- ・ ただし、実際に販売するとなると難しい部分が多い。
- ・ 一つとしては、金儲けのために売るわけにはいかないのが、小分けで売るということになる。大きな需要があっても公的な活動の側面もあるので、売ることができない。
- ・ 技術的継承としての側面もあるので、市民がボランティアで焼くのも有意義な活動であると思われる。

泊

- ・ ボランティアの現物支給として、炭があってもよいかもしれない。
- ・ 薪ストーブユーザーが、自分たちで使っている例もある。
- ・ そういったシステムがあるとよいかもしれない。

広若

- ・ 炭焼き職人は、ボランティアが手伝ってくれば受け入れるのであろうか。
- ・ 東京で脱サラして炭焼きをしている人は、積極的にボランティアを受け入れている。

泊

- ・ プロの炭焼き職人が、ボランティアの受け入れをしてもよいのではないかと。

相川

- ・ 矢作川流域で東海農政局が実施した調査では、炭焼き体験の受け入れ意向についての調査も実施している。

広若

- ・ 本来「伐る人」と「焼く人」は一緒のほうがいいのではないかと考えている。
- ・ 原木の質をきちんと分かった上で、炭を焼いた方が炭の質は高い。
- ・ 生育状態等や、更新も考慮して伐採するのが望ましい。

染谷

- ・ 実際に原木を切り、炭を焼いている人間としては、機械化が早道だと思う。
- ・ ちなみに、足助屋敷では原木は全て自前で調達している。

広若

- ・ 機械の導入は公的な補助があった方が望ましいだろう。

松野

- ・ 機械は高いので、共有できれば普及も進むのではないかと。

松村

- ・ 神奈川では、以前あった横浜の森フォーラムを母体としたログソールの共同使用の例がある。
- ・ 行政（横浜市）にも協力してもらって行った。
- ・ しかし、メンテナンス費用の分担等の理由でうまく行かなかった。
- ・ 今は一つの団体に置きっぱなしになっているようである。

田中

- ・ 農業分野では、設備の共同所有、収穫作業等の作業委託は進んでいる。
- ・ 現状として、生産者のまとまりというものはあるのか。

広若

- ・ 現状では、まとまってない。
- ・ 和歌山では木炭協会があるが、生産者はまとまっているわけではない。
- ・ ただし、伐採職人のレベルは皆知っている。
- ・ まとまって何かしているということはない。
- ・ 本当は炭焼き職人が集まって、作業委託をする方が、伐採職人のやる気も上がってよいのだろう。

相川

- ・ 足助地域でも、それぞれの炭焼き職人が自分がナンバー・ワンだと思っていて、まとまりはないようである。
- ・ ただし、これまでの議論を聞いていると組合化も必要なのではないかと思われる。

松野

- ・ 足助地域は昔から炭を焼いていることもあり、生産者がそれぞれ閉じていて、周りに広がらない。
- ・ 一方、豊田では新しく焼き始めた人が多く、集まって何かやりたい、地域のために何かしたいという気持ちもあるので、比較的外から技術を受け入れているようである。
- ・ ただし、これまでボランティアで焼いていた炭の値段を、今更上げることができないという側面もある。
- ・ 分業もやり方によってはできなくはないと思っている。

木俣

- ・ 山梨県の身延竹炭協同組合の事例を紹介してほしい。

松野

- ・ 平均年齢 70 歳くらい、自分の体力に合わせて仕事の量を設定している。一律、時給 700 円で作業をしている。作業内容に依らず一律の時給である。作業時間は、5 時間程度であまり長くない。
- ・ 理事長の人徳も影響しているのかもしれないが、組合に入りたい人が順番待ちになっているくらいである。
- ・ 機械化についても積極的に推進している。
- ・ 豊田のグループ窯では、後継者がいないことが問題になっている。

木俣

- ・ 一般的に炭焼きの技術とはどの位の期間で習得できるものなのか。

広若

- ・ 炭焼き技術については、一生懸命学習すれば、半年である程度できるようになる。
- ・ 基礎的な部分については、マニュアル化して理屈でまず覚えて、伝承していくのも良いだろう。

松村

- ・ 神奈川県では、他の団体の炭焼きを見に行き、他団体の炭焼き技術を学習するという取組をしている。
- ・ 足助をモデルに考えた場合、炭焼き一本で生きていく人は少ないのではないのか。
- ・ 例えば、リタイヤ組が中心になってくるのであれば、楽しみながらやればよいのではないか。
- ・ 和歌山の事例と比べると、だいぶ変わってくるのではないか。
- ・ 産業としての炭焼きと、文化も含めた炭焼きなのかという問題である。

染谷

- ・ この足助地域で、炭の質を追求するには無理がある。
- ・ 文化や楽しみという視点も加え、底辺を広げていくことを考えるべきであろう。

広若

- ・ ホームページにもキャンペーンの情報を載せるということが書いているが、生産者の情報を集める場合は、「受け入れ可/不可」を載せるのが良い。
- ・ 有機農業の場合は、見学可等の情報があって、そこを見て見学に行く場合が多い。

泊

- ・ 地域ごとに、炭焼体験の受け入れ窓口があるとよいかもしれない。

木俣

- ・ 目指す技術のレベルに応じた、色々なレベルのコースを用意しておくともよいだろう。

広若

- ・ 足助炭焼き塾がだいぶ盛況なので、今後も続けて欲しい。

松野

- ・ 足助の間屋さんが言うには、これからは炭の質が望まれるので、3年間がんばって炭の質を上げれば今後買い取るということである。

広若

- ・ 85点以上の炭を安定供給すれば、必ず間屋は高く買い取ってくれるものである。
- ・ 逆に質の悪いものが入る可能性があるため、リスクがあるので、買値を上げることができない。

松野

- ・問屋は焼いた炭を見れば、生産者が誰であるかが分かってしまうらしい。

松村

- ・炭を焼くことの評価を、どうするかを考えたい。
- ・生産量だけではなく、例えば炭と人との関わりの量で計るのもいいのではないかと考える。

広若

- ・焼いた後の炭を見て、品質をチェックするのは困難であり、どうしても生産者のこれまでの実績に基づいて評価を下さざるをえない。

木俣

- ・森林ボランティアを見ていると、社会的な使命感だけで、活動を継続させていくのはなかなか難しい部分もある。
- ・炭を焼くことがちょっとした小遣い稼ぎになることで、継続性が高まるだろう。
- ・そのためには「85点以上の炭を安定的に焼けるようになる」等の、具体的な目標を設定していけばよいのかもしれない。

流通段階の課題と解決策

野瀬

- ・流通については今のところ、名古屋の満悦商店と、足助の三木氏の二箇所についてヒアリングを実施した。
- ・良質なものが安定的に入ってくれば、問屋は買っていくものである。
- ・流通業者としては、如何に良質の炭を安定的に集めるかが、勝負のようである。
- ・三木氏は今年82歳、後3年は続けるが、その後は息子さん、もしくはその奥さんに商売を継いでほしいと思っているようである。
- ・生産者には色々なタイプがいるが、問屋を介して流通させたいと考えている人は少数派である。
- ・今は顔と顔の関係（属人的な信頼関係）で、流通が動いている。これから世代交代が起こってくるが、そこで断絶を起こさないように、関係を繋いでいくことが大切である。
- ・その一方で、直売ルートが確保できれば、流通段階のカットも検討するべきかもしれない。
- ・品質の確保の機能をどこが代替するのは難しいが、実態としては直売やインターネットでの販売が増えてきている。
- ・また、足助地域では竹炭が売れないのがネックになっている。
- ・竹炭は、原料の竹が手軽に切れる、炭に焼けるというメリットがある。
- ・竹炭については、流通業者は買わないので、どうやって消費者にPRするかという面も含めて、マーケティングが必要であると考えられる。

広若

- ・従来問屋は、品質維持機能を果たしており、問屋という存在はなくてはならない存在である。
- ・一発屋が質の悪い炭を集めてきて、DIYショップに売りつけるなどの悪例も出ている。
- ・伏せ焼きで焼いたものを、バイヤーがただ同然に買い取っていく。

- ・ しかし、その一方で問屋は減っていくのが時代の流れであり、ジレンマを感じている。
- ・ これからは、生産側で品質を維持していくしかないとも感じている。
- ・ 炭の生産が比較的盛んなところでは、炭の品評会などを実施することも、自主的な品質確保の取組である。
- ・ 生産者がある程度まとまって、質を担保するというのが基本である。

田中

- ・ 農産物の分野でも、農協の共販に乗らない流通部分も増えている。
- ・ 農協も危機感を持ち、よい農産物を集める工夫をしている。
- ・ 例えば、兼業農家等の規模が小さい農家の産物も、直販所に集めている。
- ・ 値段も農家が決め、直販所に午前と午後に様子を見ながら、品物をどんどん持ってくるといったシステムになっている。
- ・ 木炭についても、直販所に持ち込まれているケースも増えているようである。
- ・ 品質のチェックについては、生産者の自主的な規制に任せているのが現状である。

広若

- ・ 足助屋敷でも炭を売っているのか。

染谷

- ・ 一月に2窯(30俵×2)出してる。自家消費分も結構あるが、全部売れている。

広若

- ・ 生産者の名前を表示するのは、品質保持の観点からは有効である。

嶋田

- ・ 野菜等と違って、炭は飲食店での利用が多い。
- ・ 炭ではなくガスでも代替可能なので、品質の保証がより必要ではないかと思う。

広若

- ・ 備長炭でも何でも、生産者の評判が一番大切である。
- ・ 生産者が複数あれば、一人の生産者の評判が落ちても、その他の生産者の炭を紹介できる。
- ・ したがって、生産者に複数の選択肢があることが必要である。

染谷

- ・ 常々、足助屋敷での炭の販売を考えている。
- ・ 三木氏が問屋をやめた場合、足助屋敷が炭の集積・販売拠点となる可能性があると考えている。
- ・ そういったシステムを作っていきたい。
- ・ この辺りでは、そんなに大量に炭を焼いている人も少ないので、足助屋敷でもその機能を果たすことはできるだろう。

泊

- ・ 炭を使っているお店の人がある程度目利きになる必要がある。
- ・ 山梨県のNPO「えがおつなげて」では、パティシエがベリーの栽培の様子を見学するプログラムを実施している。
- ・ 実際に使う人間が体験することで、理解が広がることもあるだろう。

山口

- ・ 一消費者としては、炭の品質など分からないというのが、正直なところである。
- ・ 等級があればよいが、なければ一番安いのを買ってしまおう。

松村

- ・ ペレットクラブでは、ペレットの品質の自主規格を作った。
- ・ 導入時期であり、問題が生じたとき、何が悪いのかが分からない。また、ペレットの評判が落ちるのが怖い。
- ・ ペレットが悪いのか、燃焼機器が悪いのか、個人の使い方が悪いのか、相性が悪いのか、など。
- ・ 例えばホワイトがいいと言われているが、岩手型とは合わないといった状況である。
- ・ 本来はメーカーが自主的に作るべきであるが、ペレットクラブが自主的に作っている。
- ・ ラベルをつけてもらうのは難しいので、調査をしてホームページ上で公開している。
- ・ 燃料とストーブの相性を、消費者に向けて発信している。

広若

- ・ 炭の品質は、ペレットほどシビアなものではない。
- ・ はねなければ（爆跳しなければ）問題はない。
- ・ 爆跳するかどうかは、原木状態である程度判断できる。炭焼き窯に入れるまでに決まっている。
- ・ 樹種と、伐採後の経過時間、ストックしている場所（雨ざらしか否か）等で決まってくる。
- ・ したがって生産者のモラル、信頼が必要になってくる。
- ・ これから直売が主流になると、生産者情報が必須になるので、その仕組み作りは早めにやった方がいいだろう。

木俣

- ・ 焼き鳥、ウナギを料亭等で焼く場合と、バーベキューでは品質が違うものか。

広若

- ・ 料理屋で使う炭は、固くて火持ちがよいものが望ましい。
- ・ ただし、炭を1窯焼くと、様々な品質の炭ができるものなので、等級別に箱に詰める技術も必要になってくる。全てが85点というわけではない。
- ・ 出荷先、生産側の双方が納得いくように、上手く箱に詰める技術の習得に3年かかると言われている。

松野

- ・ 身延では商品の種類が非常に豊富であった。

- ・ また、いくつかの商品のセット、JRと連携した体験イベントとのセットなど、販売方法に工夫をしている。
- ・ 竹炭の入った羊羹、豆菓子などの商品もある。
- ・ 他企業との連携による、新しい流通経路の創出にも挑戦しているようである。

広若

- ・ 竹炭なので、既存の薪炭の流通の仕組みを利用せずに、開拓している。
- ・ 品質や安定供給はきちんと努力しているから実現し、企業との連携ができる。
- ・ 現場責任者が「生き甲斐」として、確実に責任を持って品質管理している。

消費段階の課題と解決策

相川

- ・ （下川町、スワン製炭の事例紹介）

広若

- ・ 下川町の事例は、自分の出身大学である立命館大学の室田ゼミが関わっている。
- ・ 電話帳から調べた全国の「下川」姓に連絡し、会員になってもらった。下川町を「第2の故郷」として捉えてもらっている。
- ・ 「ふるさと会員」は全国に1万人おり、下川町の一連のブランド商品を買っていた。
- ・ 「炭パック（ふるさとコンロ）」は今もそこそこ売れているようである。
- ・ スワン製炭は、炭は厳しいので現在は撤退している。

泊

- ・ 「第2の故郷」は重要なキーワードかもしれない。
- ・ 田舎暮らしにあこがれながら、実際の田舎が無い人や、遠いところにある人にとっては、週末にちょっと出かけることができるようなところがあれば、意味があるのであろう。
- ・ 体験プログラム等のソフト部分を充実させれば、可能性があるだろう。

田中

- ・ 農作業だけではなく、農村の生活を体験する。
- ・ 収穫だけではなく、草取り等の体験もする。稲だけではなく、畑作も体験してもらおうなどが増えてきている。

泊

- ・ 別の話になるが、現代住宅は高气密なので、炭使用時の一酸化炭素中毒に注意しないと危険である。
- ・ 今は実際に炭を使った人が少ないので、消費者教育も必要であろう。
- ・ イタリアのキッチンストーブのように、使いやすい調理機器の開発が求められているのではないか。
- ・ お風呂をバイオマスで使えるような機器があればよいと思っている。
- ・ 国産はなく、オーストリア産のがあるらしいが、まだまだ値段が高い状況である。

山口

- ・ オーストリアと日本では、給湯の事情が違う。何軒かでシェアできるような仕組みが必要かもしれない。
- ・ 値段が140万円では、ガス給湯器が30万円ですってしまう状況では難しいかもしれない。
- ・ 都市部では難しいというのは、ペレットを保管する場所がない、という問題である。
- ・ 高気密住宅では、開放系の調理機器の利用は難しいかもしれない。
- ・ 備前のプロジェクトでは、木の炎の持つあたたかさを前面に押し出して行こうとしている。
- ・ ただし、普及台数がまだまだ少ないので、最終的には価格面の問題になってしまう。
- ・ また、炭の場合は調湿等の、燃料以外の用途もあると聞いている。
- ・ 炭がインテリアとして置いてあることで、「和」の雰囲気が出て、興味を持ってもらえるのではないかと。

泊

- ・ 「オール電化」に対抗して、「オール炭化住宅」というコンセプトを提案している。
- ・ 発電に用いる際も、炭化工程を踏むことでタールの発生を抑えることができるなどのメリットがある。
- ・ 内容については、岡田氏が詳しい。
- ・ 建材としても炭の需要は見込めるので、そういったことも視野に入れていくべきであろう。

村田

- ・ 一番興味があるので、「食」なので簡単なコンロなどの工夫が欲しい。
- ・ 焚き火 Bar を作って、それを「見せる」ことを売りにすることができるのではないかと。

泊

- ・ 一般住宅では、近所から苦情が来るために、焚き火が難しくなっている。

木俣

- ・ 価値として、文化や地域作りという観点を組み込むことで、見えてくることも多いだろう。

松村

- ・ 生産・流通・消費については、それぞれの事業者こそ考えるべき。
- ・ 薪炭キャンペーンでは、逆に流通の統計に載らないようなものを対象にしてみるのがよいのではないかと。
- ・ 例えば、庭先から始める炭焼きなどもいいかもしれない。
- ・ 炭や火を暮らしの中に取り入れたいと考えている人達の役に立つような情報が提供できるとよいかもしれない。

広若

- ・ 知り合いの陶芸家にモダンな火鉢を作る人間がいる。
- ・ 例えば、火鉢コンテストをやってはどうか。
- ・ これからの時代の炭や火のあり方を考えるといったコンセプトでやるといい。

広若

- ・ ガスコンロで起こす炭のコンロは、灰が落ちてガスコンロの目詰まりを起こしてしまう。
- ・ もっと気の利いたものが必要である。

泊

- ・ 家庭での使用をしっかりと考えることは大事であろう。
- ・ 若い人、子どもに、燃料機器の使い方をしっかり教えなければならない。

広若

- ・ 炭のストーブを作っている、新潟の平原氏のものはとてもよい。
- ・ 「暖談森杜(だんだんもりもり)」の木炭ストーブは良い。
- ・ 50万円くらいするが、火の美しさは素晴らしい。
- ・ http://www.nagaoka-id.ac.jp/design/data/h13_2.html
- ・ 埼玉大が、一酸化炭素を酸化し、CO₂にする触媒を開発中とも聞いている。火鉢とセットにすればよいだろう。

(5) ブックレットについて

田中

- ・ 書店に並べると考えると、すでに活動をしている人だけでなく、一般読者にもPRできるものにしたい。
- ・ 実際に活動している人が、他の人にもPRできる人できるような本にしたい。
- ・ 実際に活動している人にとっても再発見があるようなコンテンツがあればよいと思っている。
- ・ それに加えて普及啓発用の参考になるような、詳細なデータも入れることにする。
- ・ ブックレットではあるが、しっかりした単行本のような形にしたい。
- ・ 以前、農文協で出版した「木の家に住むことを勉強する本」のようなイメージである。実用本という形で作っている。
- ・ A4判の変形版で、ビジュアルに展開しやすく、レイアウトも工夫しやすい。できれば、こういったものにしたいと考えている。
- ・ 100ページ前後でやっていきたいと考えている。カラーを入れて、中身はモノクロで。
- ・ エコ間伐紙は使いたいが、価格が高いので検討中である。
- ・ 5,000部~10,000部くらいの初刷りを考えている。
- ・ 運動本という側面は隠しつつ、薪炭の魅力を伝えていきたい。

村田

- ・ 書店で売る、一般の方にも手にとってもらうことが前提であるので、火のある暮らしの魅力を伝えることに腐心することになるだろう。
- ・ 薪炭を使う意義を記載する必要があるが、その後は様々な角度から「火のある暮らし」の魅力に迫っていくということになるだろう。
- ・ 「火のある暮らしトーク」を巻頭に使う予定であったが、若干「火のある暮らし」から外れてしまった。が、なんとかつなげて使いたいと考えている。

- ・ 先進的な取組、地域での取組等の実際動いている取組も、魅力の中に取り込んでしまう予定である。
- ・ 農文協案としては、煙、灰等の副産物の魅力も紹介したらよいと思っている。
- ・ 写真のよいものがあれば、提供をお願いしたい。
- ・ ボトルネックの部分をごくごく簡単に紹介して、本を閉じることになるだろう。

泊

- ・ 価格設定が重要。1,000 円くらいが気軽に手を取れて良い。
- ・ オールカラーで考えた方がよいのではないかと考える。
- ・ むしろ価格とカラーページの分量等から、全体のページ数を決めればよいのではないか。
- ・ パラパラと見て楽しいと思ってもらえるようにしたほうがよいのではないか。

村田

- ・ 価格としては、1,000 円程度を想定している。
- ・ 個人的には、カラーページもできるだけ増やして、「魅せる」方向でいきたいと考えている。

広若

- ・ 「癒し」という要素を入れられないか。

木俣

- ・ 機能として目指しているのは、地域で炭を焼いている人達のエンパワーメント。
- ・ 利用者等とのつながりを増やすためのブックレットにできればよいのではないか。

広若

- ・ また「バイオマス絵巻を作ってみよう」といった実際に取り組めるような内容があると良い。
- ・ 学校で作る地域マップの薪炭に特化したものとしてやっている。

松村

- ・ 「火」という観点でキャンペーンをしていると思うが、「火」以外の使い方にも着目してもよいのではないか。
- ・ キャンペーンのタイトルは運動のタイトルとしてよく分かるが、ブックレットのタイトルとして「火のある暮らし」というものは、やや分かりにくいと思われる。

木俣

- ・ 基本的には、エネルギー利用を中心に考えている。
- ・ 社会的な課題の解決という意味でも、化石燃料の代替としての、地域の持続可能な木質バイオマス利用がコアになっている。

広若

- ・ 多用途に広げると焦点がぼける可能性もある。

泊

- ・ コラム的に紹介することは十分可能であろう。

村田

- ・ 今回のブックレットの評判がよければ、農文協としても続編が考えられるかもしれない。

泊

- ・ 地域の環を広げていくことを考えると、内容もしっかり作りこんでいった方がよいと思われる。

今後の議論の進め方について

木俣

- ・ （行動宣言のマトリクスについて説明）

広若

- ・ イメージが分かりにくい、みんなでやっていきましょう、ということなのか。

泊

- ・ 暫定的なものでもいいので、目標の数字があるとよいのではないか。
- ・ 各主体の行動の積み上げにより、二酸化炭素の排出量の削減量が出るといいだろう。
- ・ 地域ごとに使えるようなものがいいだろう。

広若

- ・ 色々な期待を網羅的に出して行って、このマトリクスで整理していくのがよいのではないか。

（６）第一回戦略検討会議を終えて

松村

- ・ 頭が整理できないまま話をしてきた部分があった。
- ・ それは、きれいにアクターを整理するのではなく、やりたいことを全面に出したら良いのではないかと、という思いである。
- ・ 宣言文ももっと生々しい感じになった方がよいと思う。
- ・ きっちり考えてまとめようとする、難しい枠組みになってしまう可能性がある。
- ・ 事務局で面白いと思ったものを繋げていくような手法でもいいのではないか。

広若

- ・ これから色々と積み上げていくことになるので、皆さんと勉強しながら進めていきたい。
- ・ 火鉢コンテストは是非実現させたい。
- ・ できれば、行政をからめて、子どもの部、老人の部等を設けて大掛かりにやったらよいと思われる。

山口

- ・ 薪炭、バイオマス、ペレット等が混在して、議論が分かりにくい部分があった。
- ・ こういった形で進めていくのであれば仕方が無いとも思われるが、キャンペーンの経緯、道筋が見えにくかった。

泊

- ・ NPO がすべきことをは何かを考えたときに、参加型機会をつくることではないかと考えている。
- ・ 一般市民や、業者も含めて巻き込んでいくことが必要である。
- ・ 市民が実際に触れ合う機会を増やしていくことが大切である。

村田

- ・ 体験のきっかけの一番最初に、ブックレットがある。
- ・ 小澤氏と澁澤氏の対談が「楽しさ」ということがキーワードになっていたように、どう楽しく表現するかが大事であると思っている。

田中

- ・ 子どもに伝えていくことが、一番大事であろう。
- ・ 1970年代に林野庁が事業で、学校林に炭窯を作ったところが数十箇所あるらしい。
- ・ 現在は学校林自体が、2割くらいしか活用されていないようなので、炭窯を含めて活用を考えていくべきであろう。
- ・ これは次の段階での議論になるのかもしれないが。
- ・ 半農半X的な、普通のサラリーマンとは違う生活を目指し人が増えている。
- ・ 中学校では、職業体験が2、3日は必須の時間として入ってきている。
- ・ したがって、指導する先生を含めて、支援をしていければと思っている。

相川

- ・ 本日はありがとうございました。
- ・ 今後も活発な議論をお願いしたい。

(以上)